研究員	助教授	坂田邦洋（人類学）
〃	講師	仲嶺真信（美術史）
運営委員	教授	工藤茂
〃	〃	後藤重巳
〃	講師	染矢正一
〃	教授	二宮淳一郎
〃	〃	岩尾秀樹
事務長		白井昭一

別府大学アジア歴史文化研究所の事業

海外交流 ── 訪中団の派遣 ── （1981年11月19日―12月4日）

研究課題

1929年，北京原人の頭骨化石がはじめて発見されてのち，とくに解放後の中国における古人類とその文化に関する研究の成果は，いまや世界的に注目されるものとなっている。特にわれわれ日本民族と文化の源流ともかかわって格別に深い関心がよせられる。

別府大学は，1980年2月これら諸問題について，中国科学院古脊椎動物・古人類研究所副所長呉汝康教授を招聘して解説を受けたが，今回はアジア歴史文化研究所の事業の一環として関係研究者を現地に派遣した。

訪中団は，中国々内を北京，西安，昆明，上海，杭州とたどって縦断したが，そこには人類のもっとも古い直系の祖先ともみられるラマピテクスをはじめ，人類の進化の跡を原人，旧人，新人とたどることのできる多くの遺跡と研究機関があった。

訪中団は，これら多くの遺跡をたずね，多くの研究者と意見を交しながら，人類の発生と進化，その文化創造の実態を観察，考察した。

研究行程

1981年11月19日より12月4日にいたる16日間

北京：周口店北京人遺跡，古脊椎動物・古人類研究所，考古研究所，動物研究所，北京自然博物館・中国歴史博物館。西安：大荔人遺跡，陝西省博物館。昆明：禄豊古猿遺跡，禄豊県文物館。上海：上海自然博物館，上海歴史博物館。杭州：浙江省博物館。

研究内容

中国に出土する古人類化石とその文化遺物は，原人，旧人，新人の各段階をおおうばかりでなく，アウストラロピテクス，ラマピテクスさらにシワピテクス，ギガントピテクス，ドリオピテクスなどにいたるまで，人類の発生とその初期進化のすべての段階に関連するものを含んでいる。われわれは，これら広範な資料とその研究成果に学ぶべき多くのものがある。

まず第1に，今回の行程のなかに，人類の発生と進化の主な段階を可能

な限り多く取り入れたことである。雲南省禄豊は，人類のもっとも古い祖先とみられる古猿の出土地点であり，これから雲南元謀，陝西藍田，北京周口店さらには安徽和県の各原人遺跡，陝西大荔の旧人，雲南西畴・麗江，周口店山頂洞の新人遺跡などがある。これら各遺跡から出土した資料を系統的に実見することによって，その形態的な特徴や関連する生活様式の特徴などから，その進化過程をよく理解することができた。

第2は，雲南省の禄豊古猿遺跡を，人類の最初の発生の課題と関連させて特に注目する。1980年12月はじめ，世界ではじめてこの地でラマピテクスの頭骨が発見された。これはいまから800万年から1400万年前の，人類がサルの系統から分岐した最初のものとみなされている。人類がこの地球上にはじめて誕生した場所と時期，人類のもっとも古い祖先の特徴といった問題は，人類起源の課題のなかでもっとも重要なものであるが，これらの諸問題を解決する鍵を，このラマピテクスが握っているに相違ないと考えられるからである。

しかもわれわれ別府大学訪中団が，ここを訪れた時には，現地は1980年10～12月につづく再発掘中で，その責任者である呉汝康教授がわれわれを直接北京から案内し，調査を指導してくれた。このような機会が与えられたことは，わが国の研究者としては文字通り他に例のないことであろう。

第3に，藍田，北京，和県などで発見された古人類の化石は，洪積世の動物化石をともなうものであって，これら動物化石の研究は，今後日本における研究にあたっても検討しなければならない問題である。日本にあって，化石人類（旧石器人）の発見は，このような動物群の発見に欠ける点が多く，調査法を含めて問題点として考えておく必要がある。

第4に，藍田，北京原人，などは，人類が自ら開発した技術によって石器を加工している。礫器とよぶ未熟な石器は，自然石の一部加工にとどまるが，その形態からしてジャバ原人型のパジタニヤン文化の礫器（片面加工または両面加工）ではなく，特異な尖頭器で，握槌形に分類される。この石器は北朝鮮コムンソル原人やトクチョン人にも引きつがれ，韓国の全谷里遺跡の尖頭器形石器につづく。おそらく中国丁村尖頭器として定型化した石器文化が藍田，北京原人に祖型があるものと推定され，その結論を急ぐ時期となった。

訪中団員　団長　別府大学アジア歴史文化研究所長・教授（人類史）二宮淳一郎。
団員　別府大学アジア歴史文化研究所研究員・教授（考古学）賀川光夫。（同）研究員・助教授（人類学）坂田邦洋。（同）客員研究員（歴史学）狭間久。

11月19日北京空港に到着以来，16日間の短期間ではあったが，その間われわれは，中国における古人類とその文化に関して，研究所3，博物館・陳列所等11，遺跡3を訪問参観し，37名にのぼる研究者と交流して，当該分野における研究成果を学び，問題点について討論し，また今後の学術交流について話し合うことができた。これらはひとえに，中国科学院とその関

連諸機関，とりわけ中国科学院外事局および同古脊椎動物・古人類研究所の御配慮と，それにもとずく各研究機関，科学院各地分院，科学技術委員会の御協力の賜と心から厚く御礼申し上げる次第です。

研究会 ── 鄧健吾教授招聘 ── （1982年10月27日―30日）

1980年，別府大学は，わが国と密接な関連をもつ仏教美術の源流をさぐる目的をもって，学術調査団を北京・大同・西安・敦煌におくり，多大な成果をあげた。これを基礎に，1981年にはアジア歴史文化研究所が設立され，人類史・東洋史および美術史の各部門において，それぞれの研究活動が開始された。その中で，同年秋，当研究所の最初の事業として，人類史関係の研究者がふたたび中国に派遣され，古人類化石の調査と各地遺跡の踏査をすすめ，学術交流の実績を重ねることができた。

研究所は，これらの成果をもとに，いっそうの研究活動を発展させるとともに，海外における研究・交流をさらに活発にして，本学における研究と教育に資する所存である。

本年度研究所研究事業計画に，美術史部門研究者の招聘があげられている。これは，一昨年度訪中の成果をいっそう確かなものにし，今後の仏教美術史研究を長期的な展望のもとに発展させるために，国内外の研究機関および研究者との学術交流が不可欠であると考えた結果である。

その意味で，今回はまず石窟研究の第一人者である鄧健吾教授を招き，研究会・特別講議および公開講演会を開催することにした。この計画は，研究所の研究活動を積極的に推進するとともに，本学学生や地域の一般同学の人々にも多大な影響を与えることであろうと期待される。